

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)337714649

FAX(03)329915367

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

購読料 月額500円 6カ月前納制

### へもくじ

#### ■巻頭言

五百号、みなさんご支援、ご鞭撻ありがとうございます

2

◇「社会通信」五百号に寄す◇

「社会通信」へのいくつかの要望

岩井 章

3

初心忘るべからず

近江谷左馬之介

4

複雑で物事を見る誌面づくり

笠井 博徳

5

はつきりしている中味が良い

奥池 賢二

6

回想の向坂先生

小林 洋美

7

なによりも大衆討論を

—— 論議のなかの前進の芽 ——

11

職場における合理化の実態と闘い

—— 今、J R の職場は？(一) ——

13

書評 国労鹿児島「二万分の一の記録」

読者からのおたより

17

読者からのおたより

18

# 旬刊 社会通信

NO. 500

一九九二年三月二日

一九九二年三月二日発行

(毎月一日・二日・二日三回発行)

## ■ 巻頭言 ■

## ■ 五百号、みなさんご支援、ご鞭撻ありがとうございます ■

「旬刊社会通信」が発足しましたのは、一九七七年十一月一日です。人生の師、故向坂逸郎先生、諸先輩、同志、友人から、筆舌につくせぬ励ましを得ての出発でした。

そして、「旬刊社会通信」は、本号（一九九二年三月二日付）で通巻五百号を迎えることができました。この間、わずか一五年と五ヶ月にすぎませんが、じつにさまざまなことがありました。

いわゆる「協会・反協会」問題から国会議員への社会党大会代議員権付与（一九七七年七八年）、総評の介入による社会党の体制内化策動と新宣言（一九八〇年代前半）。社会党をめぐる情勢が大きく変わったばかりではありません。

労働運動も大きく変化しました。一九八〇年代初頭から始まった労働戦線再編により、平和と民主主義の誓った総評は解散（一九八九年）。さらには国鉄「分割・民営化」（一九八七年）等々です。一九八〇年代後半の国際情勢の激変は、予想をはるかにこえるものでした。

読者のみなさんの熱いご支援に支えられながらこの一五年と五ヶ月。私の喜びと誇りは三つです。

第一。これら歴史的諸事件にジャーナリストとして、あるいは社会主義をめざす者として、歴史の一駒一駒に面接参加しえたことです。国鉄「分割・民営化」攻撃下の国労組合員たちの激しい論争、総評・社会党プロックをなくしてなるものかと励まし合った日々、そしてペレストロイカへの不安と期待。たたかいはこれからが正念場です。仲間とともに「歴史をつくる」との気概でさらに歩みつづけていきたいと思っています。

第二。故向坂逸郎先生、岩井章氏をはじめ多くの先輩、友人、同志の仲間を得たことです。いちいちお名前をあげることができませんが、五百号までつづけてこれたのは、労働党・労組活動等、じつに多忙なかで、「社会通信」をとりあつかってくださっている仲間のみなさんご支援とご鞭撻のおかげです。心からお礼を申し上げるとともに、これからもなおいつそう励ましてくださるようお願い申し上げます。

第三。これまた読者のご支援によることです。五百号のあいだ、一号の欠番もなく、月三回の発行日を守ってこれたことです。これは私のかすかな誇りでもあります。読者のみなさん、そして印刷、製本にご努力いただいているみなさんに、あらためて感謝申し上げます。

現代は歴史的転換の時代です。世界史上、一九世紀前後のフランス大革命期、二〇世紀の大ロシア革命期の状況に匹敵します。この歴史の激動が、「ソ連・東欧」型社会主義の崩壊から幕をあけたことに、科学的社会主義を「導きの糸」として、その理想の実現にむけ活動してきたわれわれにとつての苦しみと悩みがあります。この意味で、現代は科学的社会主義が地球上に姿を現わした一八四八年いらい、その理論を党活動、労働運動への適応をめざした諸活動にとつても、かつてない試練の時です。

資本主義が資本主義であることをやめたわけではありません。現代社会の経済法則は「共産党宣言」や「空想から科学」に書かれているとおりのものですから。私たちに問われることは、歴史がどう歩もうとしているか、その傾向をしっかりと分析し、社会主義運動、労働運動前進への道を展望し、確信し、方策を明らかにすることです。微力ですが全力をつくします。

（滝野 忠）

◆「社会通信」五百号に寄す◆  
社会通信へのいくつかの要望

国際労働運動研究会会長 岩井 章

「社会通信」が五百号を迎えたことに心からお祝いを申し上げます。旬刊でできてきたのだから、もう十五年になる。永い年月よくも頑張ってきたものである。

これだけ長期に頑張れたのは社主の滝野忠君の卓抜した分析能力と労働者に対する信頼と愛情があったからである。又滝野夫人の親身の手助けが大きな支えとなっている。二人のコンビの力が紙面を輝かせている。

「社会通信」の特徴は情勢分析が正確で鋭く、しかも早いことだ。このため労働運動の指針、方向が明確に示されてきた。だから現場労働者はいつも「社会通信」を頼りにしている。ここ数年間の世の中の動きは急激で、誰もが予想し得ないことがおきるだろうが、益々頑張って貰いたい。

その立場から二、三の希望を述べたい。

- ①ソ連、東欧が崩れ今後の方向は定まっていらないようだが、これと本来の社会主義の再建について常に注視して貰いたい。
  - ②一極支配をねらうアメリカは軍事力の優位を軸として世界に影響力をもち続けるのか、それとも経済財政力疲弊のため並みの国に陥ちこむのかどうか興味深い。
  - ③しかもアメリカ一辺倒の日本はそれと関連してどうなるか。中長期的にみれば資源・食糧を輸入に頼る致命的な弱点は、今後世界景気の動向と絡んでどうなるか。
  - ④環境破壊問題に鋭い目を向けて貰いたい。
  - ⑤国労闘争援助のため今日まで全力を注いできたが今後も頑張って貰いたい。三月一杯に中労委が何か「だす」と云っているが私は、必ずしもそうみない。いずれにしても闘争現場の声をできるだけ更に多く載せて貰いたい。
  - ⑥国労闘争の帰趨は現に起きつつある連合の現場からの変化にどのようなインパクトを与えるか。連合幹部は現場の要求とは全く離れて社民結集だとかいって政治論議に明け暮れているがその乖離は何を生みだすかまことに興味がある。
- 以上思いつくまま列記したが、更に御健闘を祈る。

◇「社会通信」五百号に寄す◇  
初心忘るべからず

経済学者 近江谷左馬之介

本誌の滝野編集長から端書をいただいた。そのなかに「五百号の出版とは、夢のようです。出発が出発でしたから」とあった。

「夢のよう」というのは一つのいいまわしであろうが、「出発が出発」だったというのは事実である。この情報誌は、もともとが「協会規制」の逆流に抗して創刊されたのだからである。そのときから数えて五百号——このご時勢によくつづいたし、つづいている。その成功には、いくつかの理由がある。

第一に、向坂流といえは、足も使って書いた雑誌だからである。その記事の多くは現場で取材したルポルタージュであるか、伝聞の記事とはちがって、内容は正確であり、そして当事者たちの思いが伝わり、それが読者の心をとらえる。わずかなスタッフのことである。東奔西走、その努力は大変だったろう。

第二に、読者のためにこれほどスペースを提供している雑誌を、私はほとんど知らない。読者からの便りや投稿はおおいに歓迎され、記事にされている。みんなの力で雑誌を作ろうという意気込みが雑誌にみまぎっている。活動家むけの雑誌なのだから、それがそれに一番ふさわしい編集方針なのである。

第三に、そしてこれがもっともいいたいことであるが、その思想的立場に少しのたじろぎもないということである。

流れに抗して雑誌は歩みをはじめた。だが、いま眼の前に行っているのは、すべてをまきこんだ歴史的転換の壮大なうねりである。この大波のなかで、「現実の社会主義」は互解の憂き目をみた。こうした時代なのだから、足場のぐらつく人たちがでて異とするに足らない。戦前の人はサーベルの威力で追い立てられたが、いまは「事情の力」といったものの作用によって、「自壊」してしまうかのようである。それも科学的社会主義を棄てるというような表立ったかたちでなく、「イデオロギーからの自由」を主張するというようなかたちでの退却である。もつとも、それにも一理なくはない。社会主義の思想をもてば無謬であるという乱暴な俗論にたいする批判にかかわるかぎりでは、「大いなる失敗」のあとでそうした意見が主張されるのも、わからないではない。

しかし、そもそも科学的社会主義とは、社会主義の目標に到達する道すじとその担い手の科学的認識によって根拠づけられた社会主義思想のことであって、その思想が科学的認識を根拠づけるわけのものではないのである。だが、いま主張されている「イデオロギーからの自由」のほんとうの意味は、「変革」の立場を放棄するということである。なぜなら、実践活動なしに「変革」は実現されないが、イデオロギーを欠く実践などありようもないからである。どんな実践活動も、いかようかのイデオロギーをその基準にしている。「変革」のための組織的な実践ともなれば、なおさらのことである。本誌は、それを心得ている。本誌は「変革」の思想的立場に立っている。

また社会主義と資本主義とが「接近」して、「社会主義」思想に倣（なら）った「新しい文明」が生まれるとかいう近頃、流布されている迷論などにまどわされることもない。こうした一本の筋が本誌をつらぬいている。それが、活動家たちをひきつけている所以であろう。初心を忘れたもうな。本誌のいっそうの発展を祈る。

◇「社会通信」五百号に寄す◇  
 複眼で物事を見る誌面づくり

教問研 笠井 博徳

多分、五年くらい前に「社会通信社」設立十周年を祝うささやかな会を先輩のみさんと一緒にやった。昨年の暮れ、千葉高教組の横堀委員長から手紙をいただき、五百号記念のお祝いをやろう、と宿題を与えられていた。「そのつもり」でいるうちに五百号になってしまった。春闘が一段落した頃にお祝いの楽しい会を開こうと思っている。

社会通信社、滝野さんとのつき合いは結構古いのだが、彼から一番初めに原稿依頼された事は今でも鮮明におぼえている。日教組大会方針の解説がテーマだったのだが、その原稿は幻となった。使い物にならなかつたわけである。この経験は大変勉強になった。

この件をいつだったか彼に話したら、「そうだったっけ？」と言っていた。勉強になったのは、事情を知らない人に、理解してもらおう言葉づかいで、文章を書くためには何が必要か——ということを学んだ。

それはさておき、いつだったか、友人から「お前のような日和見とかグラグラと揺れている奴が、よく彼のような過激派とつき合っているナ」と言われたことがある。私もその通りだと思っている。

だが、意外とこういう関係が長続きの秘訣かも知れない。同じような性格の者同士は長続きしない——と何かの本で読んだこともある。労働組合だって、いろいろな考え、主張の者が曲がりなりにも一つの組織にまとまっている。お互いの存在を認め合っているわけだ。そして、互いの存在に影響し、され合いながら少しづつまとまらなうとしているのではないか。

過激派と書いたのは、うまい表現が見当らないからそう書いたわけだが、「社会通信」が次のステップを踏むために必要だと思っていることを遠慮なく書く——

第一に、基本線、原則を堅持することは当然なのだが、その上で、私のようにいつも揺れ動いている人間も大事にする誌面づくりが大切だと思う。日本人は、ケナすことには熱心だが、ほめることには無関心、不熱心な人種だと外国人から聞いたことがある。すこしくらいまちがっていても、ほめられると嬉しくなると、次はもっと頑張ろうと思うのは何れも子どもだけでなく、人間の本性のようなものだ、と私は考えている。

日教組から離脱した全教の役員が「笠井さん、日教組はどうですか？」と聞いたので、「共産党系の人はいなくなつた(少なくともなつた)けど、いろんな考えの人が、ああでもない、こうでもないやり合っているから結構楽しいですヨ。僕は、組合というのは単色主義、二分法はつまらないと思う」と答えたことがある。全教氏いわく、「私もそう思う」と。これは全教氏の本音だと思う。単色主義、二分法は発想を貧困にするものだと私は考えている。人間やその集団は、批判されたり、ほめられたりしながらすこしづつしか成長できないというのが私の持論だ。これが、「社会通信」への第二の提言。

第三は、外国の事情を客観的に紹介してもらいたい。時々、おもしろい記事が掲載されるが、ぜひ継続してほしいと願っている。

以上、とりとめのないことを書いてしまつたけど、よくまあ、五百号も続いたものだと思う。複眼で物事を見ることの大事さが指摘されているが、「社会通信」の前進、発展にも、そのことが言えると思う。切れ味の良さに加え、ワビ、サビもぜひ加えてほしいと願っている。まずは、心から五百号に敬意を表し、改めてお祝いの会を読者のみなさんと実現したいものだ。

◇「社会通信」五百号に寄す◇  
はつきりしている中味が良い

国労東京地本上野支部出向連 奥池 賢一

私は「情報をしつかり分析し正しく理解していない者は、現場の労働運動でも間違いを犯す」と教わってきた。もちろん、この訓えは正しい。しかし、あのソ連邦の崩壊が示すようにこの情報分析はなかなか曲者であると考えねばなるまい。

どこが問題であったかと言えは考える主体が余りにも未熟であり学習不足であったようだ。まさに、自分自身の反省である。いろいろな分析があまりにも請け負いであり、現場から積み上げたでなかったからである。

私は青年部時代は随分と原則的なことを主張し親機関の役員と意見が衝突した思いがある。その後、親の役員を担い「力関係がどうの」、「情報が」、「巧みに言葉を使い分けることに疑問を抱いていた。その時々判断で「仕方ない」と言ってしまうればそれまでだが、結論を出すまでどうであったのが大切なのである。幸い、周りには議論をし合える仲間がいた。情勢を語ると同時に自分たちの情勢分析はどうだったのか持ち寄り場が不足しているのではないかと今になっていれれば思う次第である。そのことが社会通信に期待している点である。

国労組合員として私の所属していた池田清算事業団分会から三十四名が第三次広域採用に応じ東京中心にきたが、議論の集中している時期にもっと交流が全国的にできれば良かったと悔いが今でも残っている。企業内闘争とはよく言ったもので、かんじんな時には労働組合の中で判断してしまう。しかも、その議題がだんだん小さい範囲で処理しようとする傾向になっていく。

東京に来て三年が過ぎようとしている。三年間の出向もこの五月で満期を迎えJ Rに復帰する。北海道・九州から国労にこだわって広域採用に応じ、分散配置され出向と要員センターに分けられ、また復帰時期を迎え分断される動きがある。中労委に提出されたJ R資料では、自己申告・個人面談の結果七十九%が出向期間満了復帰を希望し、四%が延長を希望、わずか十七%が期間前復帰を希望しているというのだ。ウソの報告である。面談を実施したJ Rは、復帰を想定し自ら三年と期限規定した以上「早期復帰を希望するか」といった設問は準備していなかった。早期復帰させないのかと質問しても、満期までと応えていた事実しもなく、「とにかく戻せ」と言わない限り十七%に入っていないのである。

広域に応じた中での論議の違いが、この三年間で随分と感ずることがあったが、国労でありながらJ Rと分離され出向に連れられ健康破壊をはじめ、仕事人間にされ下請け労働者の差別的現実をおもい知らされてきた。そんな中で、組織現状も違い支え合いを自力で取り組んできているが、生活基盤も変化し一人ひとりの判断が先行している。

先日、全国一般労組の先輩から国労の状況報告を聞くとき、どういった立場の人が話したのか問直し聞くようにしている、というのだ。中労委を巡る動きやJ R内の労組の動向にしても職場と中央では違っていると指摘された。

採用差別事件を柱とする闘争の解決を巡って、内部では喧々としていたが、敵の狙いをしつかりみすえ、労働組合らしく組合員一人ひとりはおろか支援共闘の仲間の声を大切にしていけることが求められている。動きが早いほど、情報を持ち寄り分析できうる基礎をいっぱい集め、一人ひとりが主張できるものが社会通信五百号であり、主張がはつきりしている中味を造っていけるものと、読者として痛感している。

## 回想の向坂先生

小林 洋美

三年ほど前になる。向坂先生の奥様と、和氣文子さんに、お土産の鮭茶漬を買って、列車に乗った。向坂先生へのお供えも思ったが、奥様が持て余されるかもしれない、どの思いが胸をかすめたので止めにした。

ところが、長岡駅を過ぎた辺りで、突如として、「僕の甘いものはどうした」という、向坂先生の声が出た。もちろん、この声は私にしか聞こえない。内心気にかけていたことが、先生の声になって表れたものらしい。

(奥様が、処置にお困りになりますから。)

(いいじゃないか。構わんよ。)

丁度、そこへ売子が戸を開けて入ってきた。だが私は、ためらいつつ遣り過ぎした。

暫く、読書したり、景色を眺めたりしている内に、列車は湯沢を過ぎて、清水トシネルにかかろうとしていた。すると、またもや、「僕の甘いものはどうした」という向坂先生の声が出る。

(そんなに笹団子が、好きなんですか。)

(好きだよ。)

やむなく、折返してきたワゴン車を止めて、笹団子を買った。

遺影の前に、その笹団子を供えて、お尋ねしてみる。

(ご満足ですか。)

(うん。)

先生は、相好を崩して返事をされた。

### 二

遺影は、いつ撮られたものであろうか。腹の底から沸起った笑顔をとらえている。自由闊達な精神の表出だ。

私の胸の引出しにも、向坂先生の時々の笑顔が仕舞い込まれている。愉快な話題に、可々大笑された顔。「こいつめ」と思いながら、「ふふっ」と細い笑顔を漏らされた時の顔。

「僕の前では、みんな良い人になるんだ。」

見透かすように、かすかな皮肉を漂わせながら笑われた時。「そうだろう？」と、同調を求められた折の笑顔。壁の絵を指しながら、「これは、この辺りの絵だよ。ここから下井草の駅が見えたんだ」と懐かしそうに微笑されたこともあった。

或る夜、先生と一緒に、社会主義協会が分裂した時の思い出話をした。

「総会場から、肩をそびやかして出て行かれる先生をみて、随分傲慢な人だと思いました。多数決に従わない先生の姿は、若かった私には、異様に映じた。」

向坂先生は、一瞬顎を引いて、私をみつめられた。だが、すぐに目を細めて言われた。

「向坂逸郎は、傲慢な男か？」

「いいえ。たたかいの中では、ああいうこともあるのだと分かりました。」

先生のお顔に、会心の笑みがひろがった。

これも夜のことだ。先生は、お茶替わりに、一杯の砂糖湯を飲まれることがあった。そんな折りの、先生の嬉し気な素振りには、幼な子のように可愛いかった。

砂糖湯をつくる富田さんの手許に、待ちきれないような先生の視線が注がれる。「はい」と湯呑みを手渡されると、「ん」と、声にならない返事をされた。それに口をつける前から、もう笑みがこぼれはじめる。

「おいしいですか。」

先生は、黙ってこくんと頷かれた。

先生の晩年に、とても誇らしそうな笑顔に出合ったことがある。それは、手術をなさった後のことだった。

和氣文子さんが、私に、「先生は、体力の回復に、とても努力なさるのよ。病院のなかを散歩されるのだけど、毎日その歩く量を少しづつ増やしてゆかれるのよ。ご意志の強さに感心するわ」といって聞かせた。

私は、お加減の良くなられた先生に、その言葉と感歎ぶりを、再現してお伝えした。すると、先生のお顔に、みるみる赤身がさして、何ともいえぬ得意そうな笑いが浮かんだ。褒めそやされた、幼児がみせるそのようなような笑顔だった。

笑顔は良いものだ。殊に先生の笑顔には、その感情生活の豊かさが表れていて、私は好きだった。

### 三

私が、全通の書記になりたての頃だから、二十歳の時だと思う。向坂先生が、新潟市へ講演に来られた。私は、その時をはじめ、向坂先生にお目にかかった。

この頃、私は、後に全通中央本部の書記長になった、保坂尚郎さんに頼まれて、『社会主義協会テーゼ(草案)』をガリ版で切り、印刷をした。考えてみると、写経と同じで、良い勉強をさせて貰ったことになる。保坂さんは、この印刷物を、県下の活動家に配付したようであった。そんな時代だった。

向坂先生が、日中、寛いでいられた宿舍へ、社会党や労組の幹部が、次々と挨拶にみえた。私は、お茶汲みに呼び出されていたのだが、みんなの、日頃に似合わぬ畏まった様子に、少しとまどいを覚えた。向坂先生は、静かに、にこにこして、挨拶を返していられた。

その夜、二・三十代の若い労組幹部の人たちが集まって、向坂先生を囲む会もった。会場に当てられたホールのテーブルには、ビールと銚子が並んでいた。向坂先生と私の前だけは、オレンジジュースの壺が、ただ一本立っているきりであった。先生は、「皆さんは、酒を飲んで下さい。僕と女性は、ジュースを飲みます」とおっしゃった。会場に笑い声が起って、空気が和んだ。

向坂先生は、私をご覧になって、にっこりとされた。人なつこい笑い顔だった。私の方は、どんな表情をしていたものか。頭のなかでは、「やっぱり、酒を飲まない人らしい」と思っていた。

堅くなった見せかけとは別に、「女の子は、酒を飲まないもの」と決めこんでいられる先生が、私には少しおかしかった。またちょっと後めたくもあって、曖昧な気分を味わった。

その後、それほどの時を経ずして、社会党の綱領的文書『社会主義への道』の説明のため、向坂先生が、また新潟へ来られた。その時は、弥彦温泉の旅館が、会場であった。畳



を敷いた大広間に、長机を並べて、社会党や社青同、労組の人たちが、先生のお話しを聞いた。

休憩中に、ふと気付くと、先生が私を見ておられた。視線が合うと、目を細めて微笑された。私は、恥ずかしくて周章でた。また次の目が合った時も、優しい表情で、ほほえまれた。(と思った。)私は嬉しかったが、後はずっと下ばかり向いていた。

向坂先生は、若い活動家をおしめ、慈みをもって、その成長を見つめておられる方であった。

いつか、先生が私に、「君は、なぜ進学しなかったのだ」と聞かれたことがある。事情をお話すると、「まず自分の成りたつことを考え、その後で助ければよい」という意味の言葉をおっしゃった。

私は、先生の越し方を想いつつ、「そうはできませんでした」と小さな声で申し上げた。傍らから和氣文子さんが、「先生もお婆様におっしゃられでしょう。」と、私に助太刀した。

途端に、「女は駄目だよ」という言葉が飛んだ。激しい口調であった。私たちは、それきり黙ってしまい、又、別な話しに移っていった。向坂先生の苦々し気なお顔つきのかに、人を惜しんで下さるお気持が滲んでいて、忘れることができない。

向坂先生は、自惚れも卑下も嫌われた。在りのままの伸び伸びとした精神、素朴で率直な心の状態にいる者を好まれたように思う。

四方山話をしていて朝、「私など……能力もありませんし……」と口走ったことがある。先生は、かすかに眉をひそめられた。そして訓すように、「萎縮しては駄目だよ」と言われた。

その後で、和氣文子さんに『唯物史観』に掲載された論文を褒められて、「君も四十代になると、原稿の依頼が来るよ」とおっしゃった。諾う気持には、到底なりはしなかった。だが、私を励まして下さっているお気持が、よく分かったので、黙ってお聞きしていた。

こうした経験は、私だけのものではないであろう。向坂先生は、若者たちや、働く人々を力強く肯定し、誇りをもってたたかいた続けよと、訓しつづけられる存在でいられた。

#### 四

私が、はじめて和氣さんのお宅に泊めてもらった頃のことである。和氣家の縁側の軒下に、雨水を溜めた瓶が置いてあった。中に赤い金魚が、一匹泳いでいた。庭には、板切の載った棒杭が、打込まれていて、その上に、茹玉子の黄身が乗っていた。

何かと思ひ、文子さんに尋ねたら、小鳥の餌台だという。  
「あれを置いてから、小鳥が沢山集まるのよ。」

声が弾んでいた。だが、それを狙って、猫が出没するとかで、文子さんは、眉をしかめた。女性活動家は、いつも、家事・育児・職場の仕事に活動と、息抜きも忘れて、駆けずりまわる存在だ。私も例にもれず、追われるばかりの忙しい生活をしてきた。その目にも、和氣さんのこうした暮しぶりが、とても新鮮で、清々しくさえあった。

その朝、向坂先生の前で、ふっと浮かんだ言葉を口にした。

「和氣さんは、無邪気だわ……」

文子さんには、前後の説明のない、こんな言葉は慮外のことであったに違いない。少し気色ばんで言った。

「無邪気って……無邪気なのは、先生よッ」一転して、文子さんの鋒先が、向坂先生にむ

けられた。

先生は、文子さんの語気に、一瞬怯まれたが、すかさず、「社会主義者は、無邪気だよ。邪気があつて、たまるもんかッ」と応じられた。文子さんの言いたい意味は、私には、分からないことのようにであった。これだけのことなのだが、文子さんの言いたいことと、私の語調からうかがえるものとを、同時に汲みとられて、とっさに応じられた先生の明敏さが、忘れ難い。

## 五

向坂先生は、若輩者をたしなめる時、遠慮などなさらなかった。明瞭、的確な辞で、指摘された。私にも、一つだけ、叱られた思い出がある。

津和慶子さんから、向坂先生が、船山馨の小説『お登勢』を読めと言われたと聞いた。「いいわよ。」

慶子さんは、私にも読むようにと、薦めてくれた。早速、読んでみた。それは、『お登勢』がテレビ化され、反響を呼んでいた時分のことである。

明治維新後に生きた女性を、主人公にした船山馨の小説には、他は『石狩平野』や『蘆火野』などがある。いづれも、時代背景が、克明に描かれていて、読みごたえがあつた。主人公は、利発で一途な若い女性であり、時代の波に翻弄されながらも、みな逞しく生きぬいて行く。

向坂先生に、「とても良い小説でした」と申し上げると、満足そうに、「うん」と頷かれた。ところが、その時、私の頭に不意に浮かんだことがある。

(でも、鶴代も、おゆきも、お登勢も、同じ女性だ。)

私は、思いついたままを口にした。先生は、はっとされたようだったが、すぐに背筋が伸びて、大声でおっしゃった。

「大作家でなければ、人物の描きわけなど出来んよッ」

・(船山馨は、大作家じゃないのか……)

私は、たしなめられたことも知らず、食い下がって、同じことを言った。

「でも、鶴代も、おゆきも、お登勢も、同じ女性ですよ。」

先刻より、いっそう大きな声が頭上で鳴り響いた。

「大作家でなければ、人物の描きわけなど出来んよッ」

小説から読みとるべきことは、沢山あつたのに、私はそれに触れないで、生意気なことを言つたらしい。

文子さんが、「船山馨の身近に、そういう女性がいたのよ」と、言葉をはさんでくれて、お終いになった。

## 六

最晩年の或る日。先生が、私にポツンとおっしゃった。

「僕は年がいったよ……。死んでしまえばお終いだよ。」

「書かれたものは、残ります。」

「そうだな。書いたものは残るな。」

先生の弱音など、聞いたことのない私は、言葉をどう続けてよいか分からなかった。

その後にお目にかかった時には、「僕は、九十歳まで生きるつもりです。健康で生きる

つもりです」と、きっぱりと言われた。健康維持のために、日課の散歩をはじめ、なすべき努力をしていられたのだろう。

だが、先生は、九十歳を前にして、お亡くなりになった。そして、七年の月日が立つ。私は、今しきりに、向坂先生の言葉が、思い返されてならない。時代のせいだと思う。「資本主義の本質は、変わっておらんよ。」「君たちが、だらしないからだよ。」「行過ぎがあるのは、やむを得んだろう。」「向坂逸郎も失敗してきたよ。」「僕は、マルキシストです。」「君、もっと勉強しろよ。」

私の耳にすることが出来た言葉は、先生に接した人なら、誰もが聞いた筈の言葉である。真実な言葉は、簡潔で力強い。

向坂先生の尽きぬ思い出は、その著書とともに、私を励まし続けている。

## なによりも大衆討論を

—— 論議のなかに前進の芽 ——

労働運動が連合に移行して三年になろうとしています。「解雇撤回」をテコとした、わたしたち少数組合に対する「和解」攻撃もこの流れの中でかけられました。上部（食品連合）との関係で「自粛」も余儀なくされていますが、だからこそ大衆討論がきわめて重要になってきていることを学ばされたことを報告します。

### 組合員の批判に反省

ひとつは昨年十一月のことです。職場は、年末ということで、人、物、金が戦時体制化される時です。十一月、十二月は平月の約一・八倍の生産をこなすために、短期パートを二〇〇名（在籍約三三〇名）投入し、三動体制をとります。人員増を理由に、昼食時間も通常三パターンから四パターンに。

- 平月（三三〇名） 年末（五三〇名）
- |   |                 |   |               |
|---|-----------------|---|---------------|
| A | 一二時〇〇分～一二時五〇分   | 1 | 一二時四五分～一二時三五分 |
| B | 一二時一五分～一二時五〇分   | 2 | 一二時〇〇分～一二時五〇分 |
| C | 一二時三〇分～一二時二〇分   | 3 | 一二時一五分～一二時〇五分 |
|   | (Bから①の人が三〇分ずれる) | 4 | 一二時三〇分～一二時二〇分 |

「協力要請」を受けて、組合員の気持ち（要求）を会社に主張し、「すでに走りだしているし、予定を延期して組合の主張を聞いた。来年は検討しても良い」との言質が取れた、ということ職場討論にかけました。我々執行部としては「昨年もやってきたことだから仕方ない」という意識でした。

ところが組合員から「組合の言うことを、聞く、だけで文書回答もない」「窓口交渉で済ましていいのか」「昨年やったからこそ反省があり要求がある」「執行部は組合員と一体になっていない」等々の批判を受けました。実施延期になっていた期日の二日前のことで、討論の末、一、食堂に人員補充をし三パターンでもスムーズに行くようにするのが先決。二、最大十五分の変更に組みなおすこと。三、文書による回答を求める、との要求と、文書回答なければ「現状通り」で昼食時間をとる、と意志統一し、この内容で会社に通告（実施前日）。

あわてた会社は当日の朝、「二名補充」「次年度検討」、補足として「十五分以内の変更で」と文書回答をしてみました。

もうひとつは、一月に「各自に期待すること」という主旨で工程別に個人面接がありました。ある係長の面接内容が「今年の昇給を前提にした考課内容を細かに説明」したことで「春闘の分断攻撃。問題にすべき」との意見があり、討論の過程で言われたことは、「面接そのものに反対ではない。以前だったらひとりの問題をすぐ全体討論にかけていた。一週間も前から面接しているのに個人に対応させているのが問題だ」と指摘されました。

この二つの出来事は、①職場の仲間は情勢に負けない要求と怒りを持っていること、と同時に「結果はともかく、闘い（討論）の過程が大切」と言ってきた我々自身が「形がい化」していることを痛感し、②労働組合の活性化は「組合員と共に悩み、共に闘う」ということを再認識しました。

### ゴルフと労働運動

もうひとつは、読者の中にもゴルフをされる人があるかと思えますので、ゴルフ談義を報告します。

地区労が地区労センターに移行するのに併せて、専従事務局長を廃しせざるを得ませんでした。結果として、この一月に職場復帰したAさん（非専従）の「ご苦労さん会」を四役で行いました。

A 四年ぶりに職場にもどってビックリした。活動家のほとんどがゴルフをやっていた。自分もやむを得ず道具を買った。

B 残念だなあ。これまで環境問題で討論してきたことはなんだったのか。

C いつか使うかも知れないと弟のお古をもらった。まだ使っていないが、付き合い（仲間づくり）には必要なこともあるのでは。

B ゴルフで仲間づくりはできない。どうしても「中流意識」になってしまっただけで庶民感覚からズレてしまう。それに、自分がゴルフをしていて、環境汚染のゴルフ場建設に「反対」と言えるのか。

A その通り。ゴルフをやりながらでは職場の話はほとんど出ない。暮れから正月に何回か飲みかたがあったが、いい討論ができるのはそんな時だ。

C 最近始めた近所の人が、「飲みかたと言えは職場の話しただけでもしろくなかったが、話題がかわっていい」と言っていたが、結局は実態に目つぶしされてしまう。

B 職員室でストープを囲んで、教育論議や職場実態を話すと、転任してきた若い先生が「こんな話ができるのか」と、前任校ではゴルフの話が多かったとか。

D 組合役員が「はじめにゴルフあり」の風潮になっているのが良くない。

C 賃金要求を討論するとき「文化・レジャーの社会的水準」としてゴルフを位置付けることは必要ではないか。

B ゴルフは文化でもレジャーでもない。資本につくられたものだ。自然に親しむことで立派なレジャーができるのに、ゴルフをしないと人間ではないという考えになっています。

結論はでませんでしたが、こんな討論ができる雰囲気がいいと思います。このあとはDさんのリードで「共和」「佐川」事件に話が発展し、「三〇〇万円授受」と、社会党強化等々、次から次へと進んで行きました。

(鹿兒島・N)

## ◇ JR職場からの報告 ◇ 職場における合理化の実態と闘い(一)

今、JRの職場は？

国労中央支部は国鉄解体・JR会社発足に伴い出来た支部であり、多くの同志には馴染が薄いと思えるので、その実態をまず説明したい。

国鉄「分割・民営化」攻撃のなかで、組織脱退が相次ぎ、国労東京地本管内の国労施設支部・東京支部・東電工支部・本社支部の四支部は急激に組織人員を減らし、専従者・書記等の財政面で厳しい状況に追い込まれた。組織検討委員会の中で、非現業を中心とした支部を設置することが確認され、四支部の内、JR東日本の現業職場を除く分会が中央支部に組織改編された。

### ①要員合理化

**a、出向** 会社(＝東京工事務所)は発足より「総工事費の10%程度が人件費だ、東工所は要員が余っている。もつと効率化を計っていく」として、要員合理化を推めてきた。その手段の際たるものが出向である。この五年間で東工所の社員の二割強が出向に出されている。国労組合員は10五名中二五名が出向に出され、内二名が脱退、二名が退職に追い込まれている。青年部では八八年四月にI君、八八年二月にY君・A君、八九年四月にO君、八九年七月にK君の五名が出向に出されている(青年部員一六名中五名)。

八九年四月には設計関係の子会社が作られ、設計担当の職場ごと子会社に出向となった。現在も出向期間が終了した者の玉突きで出向に出向している。

今後、会社は「五五歳にならなくとも、五〇歳以上の者は出向に出していく」方針で、年配者を関連会社の高架下開発等に出そうとしている。一方「これ以上出向に出すと業務が回らない」状況も生まれ、地域間異動者を今年初めて東工所に受け入れたり、毎年大卒の新採を配属している。労働単価の低い若い層を会社に抱えておきたいということらしい。

今年国労組合員二名が出向に出された。特に前支部青年部長のI君の場合、出向差別事件で組合が揺れ動いていた六月一四日に事前通知が出され、七月一日に三年間の出向に出された。又、出向期間を終了して職場に復帰したA君は着任の次の日に退職届けを提出し今年の一月二四日に退職する。

**b、監督マニュアルの改「正」** 要員が減らされ、本来業務が回らなくなる中で、会社は工事区における監督マニュアルの改「正」を八八年に行い、現場の立ち会いや巡回の頻度を今までの半分以下にし、現要員でなんとか業務を回せる状況にしてきた。会社は「下請け業者の責任施工体制の強化」という理由付けを行っていたが、要員を減らし安全施工を無視する姿勢は、「安全輸送が最大のサービス」という会社の口癖に矛盾するものである。当然のごとく、普通であれば起き得ない事故が多発し、会社は「充分に巡回しない社員責任だ」と自らの責任を棚上げし、責任の一切を社員に押し付けてきている。現場長も事故が起きた場合の責任回避の為に、「何でも良いから業者に指示し、その記録を残せ」と事故が起きた場合の請負業者に責任を押し付けようとしている。

会社は事故を減らす為には、「社員一人ひとりの技術力の向上が第一だ」と言っているが、

会社も「充分な要員を配置すれば事故を減らすことが出来る」ことを知りながら要員合理化が優先される為にそれが言えないでいる。そして再度マニュアルの改「正」を行おうとしている。

**c、多能工化** 東北・上越新幹線東京―上野間の開業に迫られ、工期がない中で突貫工事を行っている最中に、上野工事で事故が起きた。当夜、工事区長が線路閉鎖工事の監督者を務めていた。キ電停止を行ってやるべき工事であったが電力区が対応出来ないということ、キ電停止を行わずに工事を行ったところ、作業員がキ電線に接触し足場から転落するという事故であった。

その反省点から、会社は「安全施工を行う為に、社員一人ひとりに他系統の知識も学んでもらう」とキ電停止工事の講習会を行う事を分会に説明してきた。講習会を受講し試験に合格すれば施設の者でもキ電停止工事の監督者になれる講習会であった為に、分会では「講習会を受講しても現場での実施に当たっては労働条件の変更であるから、その時は団交を行う」ことを確認した。会社も、「基本的にはキ電停止は電力区で行ってもらう、工事区で行う時はあくまで緊急の場合のみ」と回答している。

しかし、東京・横浜電力区より、「管内において要員が不足しているので今後東工所の工事については東工所に対応してもらいたい」と言われて以降、「東京・横浜電力区管内の工事でキ電停止工事を伴う工事については東工所で行う」と会社は言い出し、緊急時のはずが簡単に常時に変更された。

組合員の誰もが「専門知識のない電気の仕事等やりたくない」と言っていたが、分会は「国労東日本も東京地本もすでにキ電停止工事の講習会については合意している」ということで、「分会独自で反対することも出来ない」という見解に立った。

講習会の内容は、マニュアル本の読み合わせと独習（四日間の殆どが独習で、中には仕事で忙しいと講習会を抜けて職場に戻って来る者がいたが、合格させている）。筆記試験も簡単過ぎるもので、誰もが合格する内容。実技も人が多いという事で代表して二・三人が実際に行くといったもので、資格を与える為の講習会だと言える。

現在、神奈川工事区においては、横浜駅構内の内海川橋梁改築工事において、工事区の社員が実際にキ電停止工事を行われている。工事発注当初は、講習会を受講し資格を得た社員が工事区に三名しか居なく、本所から業務発令を出して対応した。

会社は「今後は、専門職だけでなく他系統の知識を持って、何でもこなせるようにならなくてはいけない」と言っており、多能工化を今後益々推進していく構えであるが、多能工化の実態が要員不足を他系統の者で対応する合理化である以上、多能工化反対の闘いを強化していかなくてはならない。また、知識のない専門外の仕事は、労働者にとって大変危険なものだと言える。専門の者がやっても事故は起きるのに、専門外の者が行えば事故の起きる確立は更に高まる。会社は「事故が起きれば、監督者の責任」だとして、社員に対する責任の押し付けを強めている状況を考えれば、なおさら多能工化等認められない。

**d、変型勤務** 会社は「日曜日が休日なのは普通の会社では当たりまえになっている。工事区でも日曜日には全員で休めるようにしたい」と、「作業のない日曜日には日勤・宿直を置かない」と提案してきた。しかし、その為に土曜日に宿直した者は日曜日の始業時八時三〇分から休日になるという不当な勤務が導入された。分会は「非常識な勤務だ」と抗議したが、「就業規則にも謳われている。労働基準法にも違反していない」と強行実施してきた。

この土曜宿直・日曜公休導入の意味するものは、要員不足の為に休日が入らない工事区

の為の苦肉の策である。それを、「日曜日は全員で休めるように」と、いかにも社員の事を考えている様なポーズを取りながら導入してきたのである。

その後、日曜日だけのわずか金曜宿直・土曜特休といった勤務が指定されたり、日曜日に作業があるにも関わらず土曜宿直・日曜公休の勤務を変更しない等の勤務が「判断は現場長がおこなう」と一方的に行われている。黙っていれば会社の好きなように勤務が指定される状況になっている。

今後、ダイヤ改「正」に伴って時間短縮された場合、今以上に目茶苦茶な勤務が指定されることは必至。時間短縮に伴い工事区が日勤二種から変型一種に改悪されることもその前兆だといえる。

e、FUTURE二一 二二世紀に向けてJR東日本を五万人体制にしたい会社、どうすれば要員が減らせるかを日夜真剣に考えている。

東工所においても、FUTURE二一分科会なるものを作り、各部門についての効率化を社員自らに考えさせている。

## ②思想攻撃

a、小集団活動・提案制度・一時金 小集団活動が導入された頃は、「一、自主的参加 二、勤務時間外 三、不参加による不利益はない」とされていた。しかし実態は、現場長が参加を執拗に迫るもので、「参加しないと一時金での査定等で不利益になると」脅していた。分会では「不参加」を機関決定したが、「但し、最終的判断は個人の判断にまかせる」となっていた。勤務時間外ということで、東鉄労働組合員の多くも不満を持っていたが、現場長に二・三度呼ばれる中で九割強の者が参加した。国労組合員も本所（非現業）では革同を中心に参加し、工事区（現業）では社会党系が多い為に全員が拒否した。

最初の頃はいやいや参加していたので、活動も殆どなく、発表会の数日前から発表するグループが何とか資料をまとめる程度だった。それも時間外だけでは無理という事で、現場長が率先して時間内に行わせていた。

会社は小集団活動の停滞状況を見て、活動に対する補助金を出すようにしてきた（一回の会議費に一人当たり一、〇〇〇円。発表会の入賞グループにも報奨金）。何かやっていると金になるということで以前より取り組み方が積極的になった。また、分会で小集団活動を勤務時間内行っている事を問題にしてきたところ、会社は「業務直結型だから勤務時間内でも問題ない」と言ってきた。そういった状況の中で、工事区の国労組合員の中にも、革同を中心に小集団活動に参加する者が出はじめている。

提案制度では、「毎月一人当たり一件の提案」を目標に、出さない者には現場長が「何でも良いから出せ」と迫っている。最初は提案数を問題にし、各職場ごとの集計表を毎月の現場長会議に提出し、管理者同士の競争心を煽っていた。

次に、質を問題にし、業務に関する提案を出させるようになってきた。そして現在は、実際に実施してみても効果のあったものだけを採用するようになってきた。

ただ、現状はそんなに提案があるわけでもなく、各自の業務報告みたいな提案になっている。

小集団活動・提案制度といったものの実績が一時金での査定や昇進試験に影響してくるので、東鉄労働組合員は不満があっても参加している状況にある。そして、国労組合員の

中にもこれらに参加する者が出ている。その結果、昨年冬の一時金でも、J R発足以来初めて国労組合員に5%のアップが出た(二名、共に革同)。分会内でも参加する者となしい者との間に溝が出来ているように感じられる。

**b、昇進試験** 昇進試験については、分会青年部として「一、労働者間の競争を煽り、分断を意図したもの 二、管理者による職場専制支配を生む 三、企業人意識を植え付ける 四、国労組合員への意識改革を迫る」ものだととして、試験制度の廃止を求め、受験を拒否することを確認した。多くの青年部員から「試験は受けたくない」「賃金は春闘を闘う中で勝ち取るものだ」との意見が出される一方で、「受けなければ賃金も上がらない」「二等級では乗車証に格差がある」との意見も出された。結果一・二年目は数名が試験を受けたが、現在では民青の二名のみが受験している状況にある。

この四年間で国労組合員の受験者は四五名だが、一次試験に数名が合格するだけで、誰一人として合格していない。一方、東鉄労は受験者の半数近くが合格している。

一年目の合格者は、国労の組織破壊に功績のあった東鉄労働組合役員を中心に、試験の成績の良かった者が合格した。昭和五六年に採用になったM君が二年連続で試験に合格し、施設係から施設技術係そして施設技術主任に昇格した例もある。下の者が年配者を追い越す状況が職場内の雰囲気悪くすると感じた会社は、二年目以降は年功序列で合格者を決めている。その為に「次に合格するのは俺だ」と言っていた人が大抵は合格している。会社のすすめる施策に積極的に参加していれば合格するといった雰囲気を作られ、実際に東鉄労組合員でも小集団活動や提案に参加していない者は合格していない。

国労組合員の中にも、試験に合格することを目的に、小集団活動に参加し、提案を出し続けている者も数名いる。

**c、社員共済会** J R発足に伴い、国鉄時代の就業規則が大幅に改悪された中で、特に影響のあったものが、病休の無給化である。厳しい労働実態の中で、いつ病気になるかも分からぬ状況で、病休で休めば賃金カットになる為に、「年休は残しておこう」となっている。病休の無給化は、労働した分については金を払うという、労働⇨賃金の資本の思想であり、私達の考える労働力⇨賃金の考え方と相対するものである。

国労は病休の有給化を目指して闘いを進めてきたが、この社員共済会の発足は、この闘いを弱める可能性が大きいと思える。賃金⇨生活に関わる問題だけに、おかしいと思いながらも機関として反対できない弱さもあった。

### ③健康破壊

労働条件が悪化し、長時間労働・労働密度の強化が進めば、当然のごとく労働者一人ひとりの健康破壊が進む。併せて、小集団活動・提案制度等の本来業務以外のものがノルマとして課せられる状況を考え合わせると、労働者に与える肉体的・精神的苦痛は計り知れないものがある。

東工所でも、現職死亡・自殺者を出す状況が生まれている。精神状態の異常者も増え、会社社自身が管理者に「現場長の責任として、部下の健康管理は充分に行え」と言わせている。しかし一方では、際限のない合理化攻撃を今も強めている。

自分の健康は自分で守るしかない状況だといえる。東鉄労働組合員は自らが病気で倒れて初めて業務を軽減することを考えている。これでは過労死がなくならない。(つづく)



好評新規発行準備中 桐原 浩 (国労鹿兒島地本委員長)

## 国労鹿兒島の「一万分の一の記録」

「思い・本音・闘い、分割民営化のもとで」

題名からして言いたいことの一万分の一ということであろうが、実にいろいろと考えさせられ涙することの多い記録だ。仲間の会話をたくさんつかい、実名人りで個性をいかして書いているのも興味を引く。

国労東京の委員長の高橋さんが昨年暮れに読み、「感動して涙が出ちゃった……」とおっしゃっていたのを耳にしたかたが早速読み、私にまわってきた。

売るために書かれたものではないが、こと左様に誰かに読んでもらいたいと思う記録だ。高橋さんも百冊増刷してもらい国労の役員の方々にすすめ、国労事業センターの菅原さんも旭川闘争団で皆と読み合わせしたという。帯広からの単身赴任の広域の仲間も、「オレたちの思いそのもの。体験したことがかいてある。JR東の仲間にも読んでほしい。」と語っていた。

記録は八六年十一月、国鉄・分割民営化法案が国会で成立した頃の職場の不安と動揺が広がっていく状況をまず綴っている。つづいて組合の分裂、おぞましい人活センターでの「意識改革」等々その凄まじさに胸を痛めて読んでみると、筆者の回想がはじまる。親友との出会い。踏み切り番として国鉄に就職した昭和三四年頃の思い出だ。ここでは牧歌的なほのぼのとした人間性に心楽しくさせられる。

しかし、国労組合員としては一生忘れられない日、八七年二月十六日の記録は目頭が熱くなる。その日の組合事務所の様子、不採用通知をうけ、その場で理由を詰める仲間の真剣さ、組合員一人一人の思いも実直に、こまかく丹念に記されている。

ほとんどの国労組合員が不採用通知を受けるなか、委員長である筆者には採用通知が報ぜられた。その驚きと動揺、苦悩は一言で筆舌しえない。

自学自習の清算事業団の毎日でもいいような淋しさと苛立ちがなまましく語られている。額に汗して真面目に働いてきた国鉄労働者の誇りが大きいがうえに、人間性を回復しようとするエネルギーもまたすごい。

鹿兒島地労委の最終陳述も胸を打つ。「……それでも私は国労に残ることに決めました。なぜかと言われても一言では形容できません」「スジを通す国労を信頼していました」「公共交通に対する哲学の貧困……分割民営化に反対した国労の論理は今でもまちがってはいないと信じます」等々、首を切られても猶たじろぐことなく堂々と陳述する姿は感動的だ。広域採用の激論は、読んでいる私まで身がふるえてくる。採用拒否を受けた一人一人の人間の尊厳を守り抜こうという思いや感情がいたいほど伝わってくる。闘う労働者の意地のつよさを見る思いだ。何としても勝ちたい！その微動だにしないつよい意思が激論の方向性を決め、ふるいたたせていく。

国鉄闘争のいくつかの節目で、国労の仲間はそのこそ「苦渋の選択」をしてきた。その重みはかりしれないほど大きいものであったことを感じさせられる。

九八年五月、鹿兒島地労委の勝利の救済命令が出された日の記録は、闘う仲間のほほえみと歓喜の音が聞こえるようだ。

記録はB5判約百ページにもおよぶものだが、一気に読んでしまう。感動し、勇気がわく。筆者は、いま組合員、家族の現状・本音など増補版めざして奮闘中である。闘いのなかで悩み、苦しみ、ギリギリのところまで明らな展望を切り開いてきた者のみしか書けない記録だ。

モノ言えぬ職場がふえている。労働密度の増大で疲労は蓄積され、過労死、突然死がふ

えている。どこの職場も暗い雰囲気だ。

しかし、国労の仲間には未来をみつめる明るさがある。たいへんな闘いで、苦労は多いが、労働者の良心を大切に、みんなで討論し、みんなで表現し行動もする。勝つまで闘うエネルギーがみなぎっている。こうした力が、支援と連帯の輪をいつそう大きくしているのだ。

以上、書評らしきものを書いてみたが、この記録の重みを十分に言いあらわすことはできなかった。ぜひ一読し広げてほしいと心から願うものである。

四月上旬増刷完成、社会通信社宛、申込受付中

(滝野 嘉津子)

## ◇ 読者からのおたより ◇

**攻撃は最大の防御** 五月には出向からもどり、新たな職場で第一歩から出直します。敵がどんな攻撃をしようとも、私たちの心から労働者の怒りをなくすことはできません。「攻撃は最大の防御」、敵が私たちに教えてくれた教訓です。がんばります。(国労・T)

編集部から 過日、友人からすすめられ鹿児島島の桐原氏が書いた「一万分の一の記録」を読みました。心がしめつけられるようでいて、国労はだからたたかえるんだと考えさせられた記録です。国労の未来に労働運動がかかっています。がんばりましょう。しかも国労の正しさを生活は実証しつつあるのですから。

**あらためて社会主義を** 国民に支持される社会主義政府とはなにか。社会主義政党のあり方についてあらためて考えさせられました。さらに社会主義の学習を深めて、日本での運動の方向を考え、実践してみたいと思っています。(埼玉・T)

編集部から 社会主義は根本的には「資本主義批判」です。資本主義が資本主義であることをやめたわけではありません。ソ連についてアメリカの没落も予想以上のスピードで進行中です。「共産党宣言」そして「空想から科学」などをあらためて読み直すのも興味あることです。

**愛読しています** 愛読しております。歯切れのよい論調に共鳴します。

(愛媛・M)

編集部から ご愛読ありがとうございます。本誌も三月二一日号で五百号を迎えることになりました。ひとえにご支援と激励のたまものです。これからもよろしく!

**とりあげて欲しいこと** 毎号楽しみにしています。国労問題は国鉄(JR)組織の人以外にとっても重要な関心事です。これからもぜひとりあげてください。また国際情勢(とくに旧ソ連、キューバの動向)についても期待しています。(兵庫・Y)

編集部から 了解です。それにしても旧ソ連は悲しいですね。テレビ等の特集でチャンネルを回すのですが、最後まで見る気分にはなりません。明るい材料を中心にご期待に応えていければと思います。

**十年目迎えた新白砂闘争** 新白砂闘争も十年目を迎えました。会社も身売りし、トヨタ関連の資本となりました。弁護士も更迭され総資本としての布陣が敷かれ始めたようです。パート労働者の、そして働く者の未来をかけて不屈に闘いぬく十二名の仲間にも励まされ、今年もがんばりたいと思っています。なにもものにも遠慮しない「社会通信」の真実の声を今年もさらに力強くお願いします。(愛知・M)

編集部から トヨタ資本の地元での活動に本当に心から敬意を表します。私の出身は三重。東海三県の労働運動の状況は少しばかりは知っています。そのなかで十年もたたかいつづけられたことは驚異的です。「通信」にも報告を寄せていただければ嬉しく思います。